

H CONRAD

JOSEPH CONRAD

20世紀英米文学案内 3

Joseph Conrad

コンラッド

中野好夫 編

KENKYUSHA

20 世紀英米文学案内 3

コンラッド

1966年6月20日 初版発行

1972年5月30日 初版2刷発行

定価 600 円

編 者 中 野 好 夫

発 行 者 小 酒 井 貞 一 郎

印 刷 者 小 酒 井 益 三 郎

発 行 所 研 究 社 出 版 株 式 有 限 公 司

162 東京都新宿区神楽坂1の2

電話 東京 (269)4521(代)

振替口座 東京 83761 番

印刷 研究社印刷

美術印刷 大平舎

製本 新栄社製本

製函 加藤製函所

(落丁・乱丁本はお取りかえします)

1398-105003-1860

目 次

人と生涯 / 中野好夫 1

作 品

『オールメイヤーの阿房宮』 / 渥美昭夫 40

『島の流れ者』 / 渥美昭夫 46

『ナーシサス号の黒人』 / 高見幸郎 51

『ロード・ジム』 / 小野協一 60

『ノストローモ』 / 鈴木建三 79

『密偵』 / 渥美昭夫 99

『西欧人の眼に』 / 高見幸郎 113

『運命』 / 鈴木建三 128

『勝利』 / 小野協一 138

『黄金の矢』 / 高見幸郎	148
『救助』 / 小野協一	156
『放浪者』と『サスペンス』 / 小野協一	164
中・短編 / 矢島剛一	176
「青春」「闇の奥」「颱風」「秘密の共有者」「日脚」他	
回想記 / 渥美昭夫	208
『海の鏡』『個人的記録』	
評 価 / 矢島剛一	219
年表・書誌 / 中野好夫・鈴木建三	卷末 1
索 引	卷末 34

人と生涯

はじめに

ヨゼフ・テオドル・コンラッド・ナレンチ・コジ
 エニオフスキー (Jozef Teodor Konrad Nalecz Kor-
 zeniewski) という、法成寺入道前関白太政大臣ではな
 いが、このおそろしく長たらしい名前、いうまでもな
 くこれがジョウゼフ・コンラッド (Joseph Conrad) の
 本名、いや、もつと正しくいえば、本来ポーランド人
 としての名前である。一八五七年に生まれて、一九二
 四年に死んだ。六六歳。

もちろん今日の彼は、あくまでイギリス人作家コン
 ラッドとして、英文学史にその名をとどめている。だ
 が、彼の作家的生涯というものは、ある意味で極端に
 例外的な存在だといつてもよい。まず彼は、一八八六
 年、二九歳のとき、たしかに帰化してイギリス国籍を
 獲てはいるが、それまでは歴としたポーランド人であ
 る。そしてこの数年後には英語で物を書きはじめてい
 るようだが、少なくともそれまでは英語がそれほど自
 由だったという形跡はない。(外国語といえば、フラ

ンス語は子供のときから習熟して、手紙などフランス
 語で書いたものも多数のこっている。) 文字通り中年
 から英語作家として登場したのであり、珍らしい変り
 種である。同じような変り種には、アメリカ人であつ
 て、ほとんどフランス語ばかりで書いているジュリア
 ン・グリーン (Julian Green) だとか、アイルランド
 人でフランス語でも書いている、当世人気作家のサミ
 ユエル・ベケット (Samuel Beckett) などという作家
 もすぐ浮かぶが、グリーンの場合は、これはパリ生ま
 れのフランス育ちであり、ベケットの場合は、むしろ
 英語、フランス語の両棲類である。そういう点になら
 ず、コンラッドのほうははっきりちがう。作家として
 現われる前は完全にポーランド人であり、作家になつ
 てからはまた完全にイギリス人作家である。とにかく
 今後もそう多くは現われそうにない特殊例であろう。

第二に、一八九五年彼が処女作小説『オールメイ
 ーの阿房宮』(Amayer's Polly) をもつて彗星のよう
 に文壇に登場したのは、すでに三七歳という中年であ
 った。六七年の生涯ということからいえば、すでにた
 つぶり人生の道半ばを過ぎてしまつてからである。

作家として登場のおそいというだけならば、決して珍らしい事例でない。挙げれば例はいくらでもある。が、この点でも、コンラッドの場合は非常に変わっている。つまり、通常登場のおかれるというのは、書いていながら未熟で問題にならなかつたとか、傑れてはいたが不幸にして認められなかつたとかいいうのが、もっとも多い。また必ずしも作家を志したというのではないが、少なくともなんらかの形で文筆活動に興味をもち、またそれにしがつていたというのが大抵である。ところが、コンラッドの場合はだいたいぶちがう。そもそも英語そのものがよくできたわけではないことは、上にもちよつと触れたが、何語であれ、少なくとも作家への志望を示した事実はまったくない。「あの小説（筆者注——『オールメイヤーの阿房宮』）を書き出すまで、私は手紙のほかにはなんにも書いたことがなかつた。しかも、それも決して多くはない。また経験したことや観察したことをメモしたりしたこともない。……作家になるなどという野心は、かつて一度も持ったことはなかつた」(Till I began to write that novel, I had written nothing but letters, and not very

many of these. I never made a note of a fact, of an impression or of an anecdote in my life... the ambition of being an author had never turned up.) という『個人的記録』(A Personal Record, 1912)の一節は、よしそれが後年の告白であり、ごくわずかの修正は加えなければならぬにしても、大筋は正しい事実を述べているように思える。

そんなわけで、彼が少なくとも文学を意識して筆をとるようになったのは、後に本文でも触れるが、せいぜい『オールメイヤー』の執筆にかかる数年前、イギリス国籍を獲た一八八六年ころ以後としか思えない。そして処女作発表のときには、すでに彼の作風ははっきり確立していたばかりでなく、それはまた今日なお代表的作品の一つとして評価される完成度を示していたのだつた。

まず以上のようなことが、以下小伝を書くに当たって、最初に述べておきたい作家コンラッドの特異点である。

さて本書は、私が最初に小伝を書き、以下作品論、作家としての評価などが、それぞれ研究者によつて物

されるはずだから、私のこの小伝はできるだけ忠実に、そしてドライに、伝記的事実だけの記述にとどめたいと思う。作家論、評価にはあまり触れないつもりである。そこでその伝記的事実だが、まず彼には、主に晩年の著作だが、自伝的回想が決して乏しくない。

上にも引いた『個人的記録』をはじめとして、『海の鏡』(The Mirror of the Sea, 1906)、『わが生涯と文學』(Notes on Life and Letters, 1921)などは、いずれも自伝ないし半自伝と考えてよいものであるし、さらに彼の場合は、小説そのものの中に、想像以上に多くの伝記的事実がたくみな小説的仮構を加えて利用されているし、とりわけ『黄金の矢』(The Arrow of Gold, 1919)の場合などは、作品としての評価もさることながら、作者に対する伝記的興味としても欠くべからざる貴重な資料になっている。また死後の伝記的研究も、G. J. オブリー(G. J. Aubry)の『ジョセフ・コンラッド——伝記と書簡』(Joseph Conrad: Life and Letters, 2 vols., 1927)が一応基礎的資料を蒐集してくれている。

そんなわけで、資料は決して乏しいわけではないの

だが、ただ困ることは、コンラッド自身の語る回想が、必ずしも事実の正確さという点では全面的に鵜呑みできないらしいということである。ことに青少年時代のことは、多く数十年後に語られたものであるうえに、コンラッド自身の記憶がいはい肉親・知人間では有名な事実であったという(下述、ヘインズ『コンラッド伝』五二ページ参照)。だが、今日ではいままも述べたヘインズの新伝記(Jocelyn Baines, Joseph Conrad, 1960)の労作によつて、それらの点はほとんど決定的に修正されたと考えてよい。まずこれは今日までのところ決定的伝記書といつてよからう。したがって、この小伝も、いずれ遠い東京の書齋で、必ずしも専門のコンラッド研究者ならぬ筆者が、まことに無精な隔靴搔痒へくかくさうじやうのような感で書くのであるから、主としての拠りどころはヘインズのこの労作にもとめた。とてもこれ以上のことを、いま根本資料に当たってたしかめることは、力も暇もないからである。種本だけは公開しておくから、さらに深いことはそれら原本についてもらいた

生立ち、少年時代

ジョウゼフ・コンラッドは、一八五七年一月三日、東ポーランドのベルデツェフ (Berdyczew) と呼ぶ村で、相当の地主階級の一人息子として生まれた——もともと、一人息子といっても、母には七歳のとき、父にも一二歳のとき死に別れたので、事実上永久にひとりっ子になってしまったわけである。

父方のコジエニオフスキ家も、母方のポプロフスキ家 (Poprowski) も、ともに地主層であったことは、すぐ上にも述べた通りだが、父方の血はなかなか情熱に富んだ浪漫的人物を多く出していることがまづ注目される。祖父のテオドルというのが、ひどく勇ましい軍人氣質の愉快な男だったが、そのくせ生活能力はあまりない夢想家で、上層地主階級とはいっても、この代あたりから、だいぶ家産は浪費で傾いてしまったらしい。父アポロ (Apollo) の代は男兄弟が多かったが、それらの中の二人までが一八六三年の有名な反露蜂起に加担して、一人は戦死、一人はシベリア

流刑になって、そのままそこで病死している。アポロもまた熱烈な愛国志士だった。

ここで反露蜂起だの愛国志士だのいうことを書いたから、一言注釈を加えておくことにするが、今でこそポーランドは共産圏の有力国家として立派に存在しているが、今世紀はじめ、第一次大戦の終りまではポーランドなどという国は存在しなかった。人と土地とはあったが、国はなかったのである。そもそもポーランドというのは、大まかにいって九一〇世紀あたりにはほぼ現在の地に建国された国で、ルネサンスごろには一時国力も文化も相当に栄えたこともあったが、その後は内訌や国内分裂で急速に衰え、たちまち周囲をとりまくロシア、オーストリア、プロシアなど強國の好餌になった。そして起こったのが、一七七二年、九三年、九五年と三回にわたった有名なポーランド分割である。完全に上記三国に分け奪られたのであり、その後一世紀以上にわたってポーランドと名乗る国家は、ついに地上からその姿を消したわけである。しかし同時に、一世紀余にわたるポーランド国民の歴史は、ほとんど絶えまない領有国への反抗の歴史といつてよか

った。独立への蜂起はオーストリア領でも、ロシア領でも頻発したが、中でももっとも激しかったのは、
 王政もまたもつともひどかったロシア領においてであった。中でも有名なのは、一八三〇年の蜂起と、コンラッド自身その幼年期を過ごした六三年のそれとだった。そしてそうした愛国的情熱に燃えたのが、極貧下層の国民よりも、むしろ政治的意識にめざめた貴族インテリ、地主層などに特に多かったことは、わが国明治初期の自由民権運動などを考え合わせても、容易に察しはつくであらう。

さて、父アポロもまた愛国志士の一人であったことは上に述べた。彼はペテルスブルグ（現在のレニングラード、革命まで帝政ロシアの首府だった）大学にまで学んだことのある（中途退学）インテリだったが、帰国すると、たちまち急進独立論の指導者の一人となり、一八六二年には彼の属する政治秘密結社が摘発を受け、彼も北ロシアへの流刑を申し渡された。ときに四二歳。

が、これより先の一八五六年、アポロは熱烈な恋愛の末、女の家の強い反対を押し切って結婚をしてい

た。もちろんコンラッドの母になるエヴェリーナ・ボロフスキー（Evelina Bobrowski）である。花婿三六歳、花嫁二三歳。そして一年半後にはわがジョウゼフが生まれた。

父が流刑になったとき、コンラッドはまだ五歳足らずだった。流刑とはいっても、家族の同伴は許されたので、ここに一家の流浪がはじまることになる。最初の流刑地はモスクワのはるか北、緯度はほぼレニングラードと同じ極寒の地だったので、そうでなくとも蒲柳の質だったエヴェリーナはたちまち健康をやられる。その後、手をまわしての嘆願で、ずっと南のウクライナ、キエフに近い場所へ流刑地は移されたが、一八六五年には効なくついに死ぬ。結局は肺結核であった。コンラッド七歳。

そんなことで、彼は叔父に引き取られることになり、父の流刑はその後もつづくが、やがて一八六六年になって、彼も結核が進み出し、オーストリア領ポーランドのガリシアに移り住むことをゆるされる。ここでコンラッドは久しぶりに父と一緒に住むことになり、改めて中等教育を受けるようになる。さらに父子はクラ

コフに移り住むが、父の健康は悪化するばかりで、一八六九年にはついに亡妻の跡をおった。コンラッド一歳。完全に孤児になったわけである。

ところで、この辺で一つ、彼の家系の中に流れる文学的血脈というようなことについて、一瞥することにする。上にも述べたように、一家からは軍人だの、独立運動の志士だのといふのを数多く出しているが、とても実践的政治家、行動的革命家などというほうではなかつたらしい。むしろ夢想家といった面が強く、実際の生活能力さえ乏しいほうであったと見なければならぬ。祖父のテオドルも、父のアポロもそうだった。拙く家運を傾けるほうにばかり才能があつたらしい。父アポロにしても、急進派には属していたが、その貢献はむしろ文筆の活動にあつたようである。

しかし、ある意味で文学的関心は少なくとも父の代から現われている。アポロは事実幾編かの劇や詩の創作を出していたというし、それ以上に西欧文学の翻訳をやっている。ヴィクトール・ユゴの『海に働くもの』、『エルナニ』、さらに長詩の代表作『世紀の物語』まで翻訳して(ユゴを好んだのは国民詩人としての

共感からだろう)、ほかにも詩人アルフレッド・ヴィニーのものなど、なんといつてもフランス文学が多いが、英文学でもシェイクスピアの『ヴェロナの二紳士』を訳していたというのが、コンラッド自身も子供のときその訳稿を見たというから、まづまちがいはなからう。

母エヴェリーナはかなりの美人で、頭もよく、感情の豊かな女であつたという資料はあるが、文学的傾向のことなどは記録がない。コンラッドは『個人的記録』の中で母の印象を美しく描いているが、これはどうやら母方の叔父の印象記からの受け売りだそうであり、そのまた叔父の姉思いにはいささかの異常さすらあつたということだから、必ずしも正確度については保証できない。七歳で別れた母のことだから、あまりはつきり知らなかつたのは無理もない。

そこでコンラッド自身の文学的傾向に移るが、もしこれも『個人的記録』を信じるならば、五歳のころから猛烈に文学書を読んだとある。『ドン・キホーテ』、『ジル・ブラス』から、英文学ではディケンズ、フエニモア・クーパー、キャプテン・マリアット等々の

名が挙げられているが、事実ならたいへんな早熟である。もちろんポーランド語かフランス語で読んだらしい。このうちマリアットの海洋物語は特に興味を惹かれたという。これは後までつづくので、十代の少年になつてからも、海洋小説、航海記などは特に好んで読んだらしい。そして海員を志した動機には、たしかにこの種読書の影響があつたことを、後年になつてしばしば語っている。

さらに、これも十代のはじめころのことだが、彼自身数編の戯曲を書いたと語っている人もある。子供仲間の芝居遊びに書いたもので、すべて愛国的主題のものであつたそうだが、もちろん現物はのこっていない。閑話休題、そんなわけで、一一歳で孤兒になつたコンラッドは、以後主として母の弟タデウス・ボプロフスキー (Thaddeus Bobrowski) の世話になり、父在世中からはじまっていた教育がつづけられるわけだが、なにしろ、身体も丈夫でなかつたうえに、以上のような境遇なので、実にそれは転々として、しかもほとんどすべてが不正規・不完全である。一々迫りのは煩わしいから省略するが、もっともコンラッド自身も

あまり学校生活の規律は好きでなかつたらしく、概していえば怠け生徒というほうが当たつていたと思える。そのかわりこのころ淡い初恋を経験している。相手の女性についての詮索は別に用がないから省くとして、この時期に初恋があつたことは、『ノストロモ』の「作者の言葉」などに見ても明らかである。

さて、そこで一八七二年、コンラッド一四歳。正確にはわからないが、とにかくその年のいつか、彼は突然船員志望を叔父タデウスに切り出したという。叔父は強く反対した。翌七三年、少年コンラッドは、家庭教師某に連れられて、スイスからイタリアにかけて、はじめて数カ月の国外旅行をしているが、これなど叔父が彼の船員志望を思いとまらせるためにさせたものであるともいう。しかし、結果は反対になつた。面白いのは、この旅行でヴェニスを訪れたのが、そもそもコンラッドが海を見たはじめての経験だというのが(つまり、海に親しんで船員を志したというのとは逆である。やはり読みものの影響からくる夢が動機であつたのであろうか)、志望はいよいよ固くなるばかり、とにかく二年間ねばりつづけた。結局、最後には叔父も

折れて、一八七四年一〇月一五(？)日、たったひとりマルセーユ行き急行の客になって、クラコフを後にした。フランス船に乗りこむ手づるが一方では進められていたのだった。ときに一六歳。

一六歳の少年の海員志望については、そう深い政治的・社会的動機などというものがあつたとは思えない。幾度も言つた浪漫的な海へのあこがれということと、なんとなく自由を求める少年の情熱というだけで、一応説明はつくように思う。しかし他方、二年間も頑強に反対しつづけた叔父タデウスが、なぜ折れたかという問題については、いろいろ研究者の推測がある。どうせ推測をあれやこれやとこねまわしたところであまり意味はないから、列挙しての検討はよすが、中でもっとも肯けるのは、おそらく次の理由ではあるまいか。それは、もし彼がこのままロシア国籍をもつて故国にとどまっていれば、やがて軍籍のおそれがある。それも将校なればまだよいし、家柄からいえば当然それになれるはずだが、なにぶん父およびその兄弟たちの不穏な前歴もまだ新しい話だったために、ただの兵卒として二五年間の軍務に服さなければならぬ

公算が濃厚だった。彼ら一家としては、ロシアはもつとも憎む国である。そのロシア軍籍に二五年も縛られることは、いくら反対の叔父としても、できることなら免れさせてやりたい気持は容易に想像できる。現に叔父は一八七二年(コンラッド一四歳)にも、彼のためにオーストリア国籍を獲させようとして失敗しているくらいである。(同じ占領国でも、オーストリアのほうは圧政が少なかったのである。)してみれば、ここまですべて反対はつづけていたが、他方ではようやく、少しでもロシアから遠ざけておいてやるほうが少年のために幸福かという考えも働いて、さてこそ賛成に踏み切つたというのは、案外容易に考えられる理由なのではないか。

さらにいま一つ私見を加えるならば、当時の亡国ポーランドとしては、有望な少年少女を文化的にも親近感のあるフランスへ送ることは、決してそう珍らしくなかった。そのほうが本人のための幸福と考えられていたし、また事実その通りであつた形跡がある。シヨパンやキュリー夫人などの例を考えてみればよくわかるはず。そんなわけで、ひとたび決心さえつけば、あ

と話は異常でもなんでもなかったのであろう。

船員時代

一八七四年一二月から一八九四年一月まで（一七歳から三六歳になったばかりまで）、その間ほぼ二〇年が、あまりにも周知の海員時代である。そしてその翌年の九五年には『オールメイヤーの阿房宮』が出版され、ロンドンに居を構えることになる。その間彼は、もつとも下級の船員から出発して、歴とした外航船の船長にまで出世するし、一八八六年には晴れてイギリス国籍も獲得しているわけだが、わかりよくするために、いささか大まかではあるが、この海員時代を大別すると、

一、フランス船時代

二、イギリス船時代

という二つの時期になるように思う。なおこのイギリス船時代に、ベルギー船によるアフリカ・コンゴ時代という、長くはないが、もつとも重要な一コマが入ってくるわけである。その間に彼の航跡は、東は東南ア

ジアから南太平洋、さらにはオーストラリアまで、また西は西インド諸島、南はアフリカにまでおよぶ広大な海域にわたることになるが、ここでは、それら個々の航海について一々忠実に追うことは、ほとんどしない。極端にいえば、一航海ごとに船を変えていることもあるのだし、それらを船名まで並べてみたところで、ただ煩雑になるだけで、大した意味もあるまい。（よほど妙な興味のある人は、原書の伝記につかれない。いくらでも書いてある。）

そこで以下、ここで述べようと思うのは、もつぱらその間の彼の人的発展、また後年彼の作家活動におよぼした海上経験の意義、等々といったことだけにこだわりたい。なお特に気つくことは、後年の彼の作品というものは、想像以上に多くその素材を、これら海員時代の経験、観察から得ていることがわかる。ある意味では想像以上に自分を語っているとも言えるのである。もちろん日本流の私小説とはちがって、原体験と作品とがほとんど二つの三角形の合同に近いといったような形で現われているわけではない。あくまで創作過程の中で再編集され、変形され、さらには昇華さ

れたものとして、きわめて自由に使われているわけであるが、それにしても想像以上に多く直接体験、直接観察が、想像力の貴重な燃料になっていることは動かない。そんな意味もあって、この時代の経験と作品素材の関連は、とても細かいものや、推測ばかり濃いものは別として、少なくとも重要と思えるものは、できるだけ注意して拾い上げていくことにする。

さて、一八七四年一〇月に故国を後にした青年コンラッドは、二カ月後の一月一日には早くもフランス船に乗り組んで、第一回の航海に出ている。満一七歳と数日後である。

いふなれば、フランス船時代のはじまりであり、これが三年半ばかり、一八七八年ころまでつづいている。もちろん下級船員としてだが、航海は西インド、マルティニークなどへ。そして一八七八年四月たまたまイギリス船に乗り組んで、コンスタンチノープル(いまのイスタンブール)へ航海したのがきっかけになり、六月にはじめてイギリスの土を踏むことになり、その後はおっぱらイギリス船に乗るようになるわけである。

しかし、この時期はコンラッドもまだ二〇歳足らず

のティーン・エイジャー、これを戒むるには血氣にありではないが、七七年から七八年にかけては、彼なりのスツルム・ウント・ドラングを経験する。そこでまずそのことから書いてみることにする。

故国をはなれて一本立ちになったとはいえ、もちろんまだ下級船員として食べるはずがない。そこで当然後見人であった叔父タデウスからたえず送金を仰いでいるわけだが、これがどうも相当の額のようなのである。この叔父というのが、まことに几帳面な人物だったらしく、詳細にその金額まで記したコンラッド宛の手紙が多数のこっているのだから、たいてい一度に何百フランづつとあるから、当時下級ボーイなしその見習いとしての手当月三五フランという数字もあるところから見て、まず相当の額だったことがわかる。ところが、コンラッドは、特に放埒(はなづか)だったという証拠もないが、とにかくよく浪費したらしい。たびたび臨時の送金を要求したり、さらに借金の尻ぬぐいまで叔父にさせたことが、厳しい彼の意見の手紙で読みとれる。そしてそうした中で、武器密輸、悲恋、そして自殺未遂などという波瀾が相次いで起こる。一八七

七一八年にかけてのことである。

まず密輸事件から。いささか脱線になるが、当時スペインでは一九世紀の三〇年代にあったカルロス戦争なる内乱の余燼がいまだにくすぶりつづけていた。カルロス戦争とは、当時イザベラ女王に対し、先王の弟ドン・カルロスが王位を要求して起こした超反動派の戦いであつたが、これは一八四〇年に敗れた。だが、その後もいわゆるカルロス派は、上記カルロスの息子のドン・カルロスや、さらには甥のやはりドン・カルロスを擁し、主としてフランスの援助を受けながら、再三にわたつて国外からの侵入を企て、そのたびに失敗に終わつていた。保守対進歩、王政対共和政と、それこそ猫の目のように変転したスペイン政治の内情を、とてもここで述べている暇はないが、中でも主な侵入企図は一八六九、七二年にあつた。しかし、これまたいづれも敗れ、問題のコンラッド密輸事件の起こるころにはすでに表面的には弾圧されてしまつていたが、なおバスク、カタロニア地方には、性懲りもなく再挙を期するカルロス派が蠢動をつづけていたのである。

さて、問題の一件は、後にコンラッド自身『海の鏡』の中でほぼ真実を書いているから、詳しくはそちらに譲るとして、とにかく英、米、伊、北欧生まれなどのいかかわしい人物数人の上に、ドニャ・リータ(Donya Rita)と通称されるバスク生まれの姐御めいた女まで加わり、一味でマルセーユから火器類をカルロス派へ海上輸送しようというのだった。数回は成功したらしい。だが、結局は一味の一人の裏切りで、政府監視船に襲われ、船はみずから坐礁させ、コンラッド自身も危うく逮捕を免がれて逃れたのであつた。

前述もしたように、この事件は後に回想記『海の鏡』ばかりでなく、小説化しても、『黄金の矢』の素材にもしており、コンラッド自身、ほとんど事実そのままということを、いくどか述べているが、どこまでその通りであるかには疑問もある。また、コンラッド後年の作家的発展の上でこの事件の意義をいろいろと考える論者もないではないが、筆者は必ずしもそうは思わない。これだけなら単に年少客気のやらせた一件にしかすぎなかったのではないか。むしろそれよりも、この事件との関連から引きつづき起こつた失恋？